

ロッカバイ・ベイベー 誘拐事件

アントニア・バーバ作

倉本 護 訳

評論社

商標登録番号 第 852070 号 登録許可済

児童図書館
文学の部屋

ロッカバイ・ベビー誘拐事件

昭和 50 年 12 月 25 日 初版発行

¥ 1,200

訳 者 倉 本 護

発 行 者 竹 下 晴 信

印刷所 三 倉 印 刷

製本所 凸版印刷株式会社

発 行 所 株式 評 論 社
会 社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町 2-16

電話代表(265) 1961

振替東京 7294

(検印省略)

落丁・乱丁本は本社にておとりかえいたします。

(A-1)

A・バーバ作 倉本護訳

ロツカバイ・ベイビー誘拐事件

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

THE AFFAIR OF THE ROCKERBYE BABY

by

Antonia Barber

Original English language edition published
by Jonathan Cape Ltd.

©1966 by Antonia Barber

Japanese translation rights arranged through
A. M. Heath & Co., Ltd., and
Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo.

も
く
じ

1	ニューヨークでの再会 ^{さいかい}	9
2	商業地区の超高層ビル ^{ちようこうそう} のできごと.....	18
3	自由の女神像 ^{めがみぞう} でのふしぎな出会い.....	31
4	警官 ^{けいかん} が東八十四番通りにくる.....	45
5	セントラル・パークでの思いがけない助け.....	62
6	ハーレムでの夜の会合.....	83
7	リバイナショナル銀行 ^{ぎんこう} での作戦行動 ^{さくせんこうどう}	100
8	頭取 ^{とうどり} の事務室 ^{じむしつ} での遠慮 ^{えんりょ} のない話.....	117
9	グリニッチ・ビレッジの家.....	135

10	ワシントン広場のおじいさん	152
11	イースト川をこえて	169
12	ブルックリン海岸	179
13	新波戸場通りでの見張り	196
14	倉庫 そうこ の捕虜 ほりよ たち	209
15	海岸通りの脱出 だつしゅつ	228
16	”アメリカ杉の森からメキシコ湾流 わんりゅう の海へ”	244
	あとがき	257

ロ
ツ
カ
バ
イ
・
ベ
イ
ビ
ー
誘拐事件

倉A
本・
護1
訳6
作

1 ニューヨークでの再会さいかい

ところで、まず第一に、ロッカバイ・ベイビーっていうのは、この名まえからみんなが想像そうぞうするような子じゃないんだ——つまり、その子は赤ん坊ベイベーなんかじゃないのさ。じっさい、ぼくが初めて見たとき、その子は、もう七つくらいの手のつけられないだっ子だった。しかし、"ハワード・J・ロッカバイ二世の誘拐きうかい"なんていうよりもこのほうがずっとときのきいた題名だいめいだと、きみもみとめなくちゃいけない。たとえそれがその子の本名だとしてもさ。

そう、ぼくは初めから話そうと思う。それは、あの最初の事件のもちあがつた日の朝にさかのぼる。その日、ぼくたちはエマの家で朝食のテーブルをかこんでいた。ジョンとヘレンとぼくの三人はニューヨークに初めてやってきた興奮こうふんを口ぐちに話していた。ぼくたちの姉さんのエマと、アメリカ人で、姉さんの夫おつとのプレストンが、いっぺんにたくさんの質問しちもんに根気こんきよくこたえようとしていた。まだ四つで、人見知りするエマの娘のベバリーはオートミールのはいつているボールをじっと見つめたまま、何もいわなかった。そして八つになるベバリーの兄のリーはテーブルの片すみから、小さなくろいかみなり雲のように、ぼくたちをにらみつけた。ところで、角刈かくがりで、赤味のないうすい金髪きんぱつをし、鼻が陽気にう

わむぎ、おまけに、そばかすまである相手が、陰悪な顔をしているときは、あつかいにくいものだ。こんなぐあいだから、ぼくには、リーが何かにいらいらしているのがよくわかった。

エマは自分の子どものどちらもまったく相手にしていないようだったが、ときどきリーをちらっと見ている、リーがぼくたちをひどくきらっているのにこまっているようだった。

「いまだってあたし、ほんとうにニューヨークにいるんだって信じられないわ!」とヘレンがまるい顔を興奮でかがやかせながらいつていた。「きのうの夜、あたしたちの飛行機がこの都会の上をとんだとき、下を見たの。そうしたら、あのものすごく高いビルがみな何百万もの明かりで光っているのが見えたのよ…… そう、まるで夢でも見ている気分だったわ!」

ヘレンはいうことばがなくなつてため息をついた。するとジョンがすかさず助け舟を出した。

「姉さんはなかなかしゃべるじゃないか!」とジョンはヘレンよりも一つ年下なのに、十も年上であるように、かばっていった。「いまだってとても印象にのこつてるよ。いい、ぼくは船できたかったんだ。でもお父さんが、船を予約するにはおそすぎるっていったんだ」

「そう、何もかも急だったんですものね」とエマがいった。「あなたのお母さんが手紙で、自分たち夫婦は子どもたちの学校がちやうど休みのときに、何かお祭りの写真をとりにニューヨークニアに発つのだけど、子どもたちをおいていかなければならないのがとてもつらいっていつてきたの。そしたら、あたしにはそれがあなたたちに会うまたとない口実になるように思えたのよ」

「すばらしいエマ！」ぼくは愛情をこめていった。「お姉さんには想像もつかないだろうけど、電話をくれたとき、ぼくたちはとても気分がふさいでいたんだ。お父さんたちにいっしょに連れてつてくれていろいろ頼んでいたんだよ。ヘレンはお父さんが本を書くのを手伝うって申し出たのさ——だって作文ですばらしくいい成績をもらうからさ——それに、お母さんは、ぼくの写真はものすごくよくなくてきてるって、いつもいってるんだもん。だからぼくたちはとても役立ったにちがいないんだ。ジョンだって何かできたと思う」ぼくはジョンのとくいなものを思いつこうとしたが、何も思い浮かばなかったの、「弟だって荷物をはこぶくらいのことではできたよ」ときこちなくいった。

ジョンはおこって鼻をならした。「兄さんやヘレンよりずっと役に立ったぞ」とジョンはいった。「ぼくはキャンプファイアをもやしたり、ワニのステーキを料理したりできたよ」

「ぼかね、ニューギニアにワニなんかいないわ」とヘレンがいった。

「どうしてわかるのさ？」とまちがいをいわれるのがいやなジョンがいいかえした。「奥地はいちども探検されてない所もあるってお父さんはいったよ。だったら、ワニがいるかどうか、どうしてわかるんだ？」

「どっちにしても」とぼくは、エマのほうをふりむきながらいって、二人がくだらない議論をまたはじめるのをみずにふせいだ。「お父さんとお母さんは、ぼくたちがマラリアか何かにかかるといけないから連れていかなかったのだと思う。だから、サセックスはきゆうにこの世の中で一番たいくつな土

地のようになったんだ。それで、お姉さんが電話をくれたとき、ぼくたちの祈りが天につうじた気分だったよ！」

「あたしたち、お母さんのまわりに集まって、お姉さんが何をいつているのか聞こうとしたのよ」とヘレンがつづけた。「そして、お母さんが顔をあげて、にっこり笑いながら、『わたしたちの留守のあいだ、あんたたち三人がニューヨークで一月くらすのはどうかしら？』っていったの」

「ぼくたち、すっかりぼ、かんとしちやったのさ」とジョンがいつものように大げさにいった。

「そうあつてほしかったよ」とぼくはいった。「ぼくの記憶じゃ、おまえとヘレンは、船で行くとか飛行機で行くとかさつそく口げんかをはじめたんだ」

「そのとおりだよ。そして姉さんが勝ったんだ。クイーン・エリザベス号の船室をとるにはおそすぎたからさ」とジョンはいわくありげにいった。ヘレンとキューナード汽船会社が共謀したような口ぶりだった。

「きみたちは飛行機の席をとれただけでもとても運がよかつたんだよ」とプレ斯顿がいった。「八月はとてもこんでいるときだからね」

「あたしも飛行機に乗ったわ」とベバリーがからになったオートミールのボールからきゆうに顔をあげていった。

みんなは話すのをやめ、ベバリーをばげますように見た。エマがいった。「あなたがどこにいったの

か、みんなにお話しなさい、ベバリー」

しかし、みんなの目が自分にそがれているのを見ると、ベバリーはまたはずかしがって、エマのスカートのなかに顔をかくしにいった。エマはベバリーを片手でだきよせると、息子のほうを向き、「あなたははずかしがらないわね、リー？」と会話の仲間にいれようとしていった。「あたしたちが飛行機でシカゴに行ったときのことをみんなに話しなさい」

しかしリーはまた顔をしかめただけで、こたえようとしなかった。ぼくたちがここにいるあいだ、この子がずっとすねているようだ、ああ、何もかもぶちこわしだな、とぼくは思った。プレストンとエマがアメリカに向けてイギリスを出発したとき、リーは四歳だったが、その時以来ぼくたちはリーに会っていないんだ。いま、リーは八歳だが、ぼくたちが知っていたあの元気のいい子は、大きくなつてすっかりとつつきにくい男の子になつたようだった。

ジョンが話題をかえるまでみんなきまずくだまりこんでいた。

「ところでさ」とジョンはいやに明るい声でいった。「ぼくたちの見物は手はじめにエンパイア・ステイト・ビルのとつべんに行くことからはじめようよ。何といつても、世界中で一番高い建物なんだ」

「高ければいいってもんじゃないわ」とヘレンがいった。ヘレンは自由の女神像のほうがいいとすでにいつていた。

これはジョンにたいするちょっとしたまい当てごすりだった。ジョンは短気でこうしたことをとて

も氣にするほうだからだ。またはしまった、とぼくは思った。正直なところ、この二人のおばさんときたら何かといえぼすぐ口げんかになるんだ。もし知らない人がこの二人が口げんかするのを見たら、仲がわるいと思うだろう。だけど、これはほんとうはまあ終わりのないゲームのようなものなんだ。二人はおたがいに知恵くらべをやつてたのしんでいるみたいだ。だけど、たまに、どちらもしきづまるようなとき、ぼくはちよつとうんざりするが、どちらか一方に味方するようなぼかなまねはしない。そこでぼくはエマにこの仕事をうまいことおしつけた。

「お姉さんはここにきてもう何年にもなるね」とぼくはいった。「だからどこから見物しはじめるのが一番いいか知ってるでしょ」

しかしエマはむかしのことをよくおぼえているので、ジョンとヘレンの口げんかのあいだにはいるようなぼかなまねはしなかった。エマは共謀者のようにぼくを見てにやつと笑うと、何も知らない夫にそのいやな役をまわした。「プレストンはニューヨークで生まれたのよ」とエマはいった。「だからこの人は知らないことなんてないわ！ この人は専門家よ、リチャード」

ぼくたちは、プレストンのほうを期待をもつて見た。プレストンは、専門家がするように、満足そうに、それでいてひかえめな顔つきをした。

「ところで、きみたちはエマに耳をかすことはないよ」とプレストンがいった。「ぼくはやつと三十年でとこだから。それでも、ぼくの助言がほしいというのなら、きみたちがたぶんこれまで一度も聞い

たことがないビルを最初に訪れたらしいな。それはね」とプレストンは劇的効果をあげるために一息入れた。「ぼくの働いているリバティナショナル銀行の建物さ！」

ぼくたちは顔をくもらせた——とてもつまらないところのように思えたからだ！これにこりてこの次からは人に責任をおしつけたりしない、とぼくはかなしい気持ちで思った。行儀作法をこころえていたから、ぼくたちはすぐ顔をくもらせるのはやめて、興味をかんじたふりをしようとしたが簡単ではなかった。

「ああ、ぼくにはわかるよ」とプレストンがいった。「きみたちがそれをただのたいくつな古い銀行の建物だと思っているのがね。しかし、そうじゃないってうけあうよ。それはびかびか光るあたらしい超高層ビルさ——むろん、六カ月くらいまえに完成したばかりなんだ——ちょうどマンハッタン島の先端にあつて、町や港を見わたせるすばらしいながめがえられるんだよ。リーは全部見てまわったことがあるから、みんなにそれがどんなに大きなビルか話せるだろ？」とプレストンは息子に説明をもとめた。かみなり雲のようなまゆの下からリーはぼくたちをひとわたり見た。「もんくなしさ」とリーはしぶしぶいった。

プレストンはまゆをしかめた。「おどろいたな、いったいおまえはどうしたんだね、リー？腹ぐあいでもわるいのか？」

「違うよ」とリーは落ち着きなくもじもじしながらいった。「なぜみんなぼくにうるさくいうのさ？」